

【報告】ヴァッサー大学における授業実践

人間文化創成科学研究科 菅 聡子

2009年11月15～22日、米国・ヴァッサー大学 (Vassar College) において、FD 海外研修として授業実践を行った。交流プログラム全体は、大学院 GP との共同派遣であったため、日本語の授業参観等は合同で行った。滞在期間中のプログラム全体は以下の通りである。

- 11月16日 日本語実習参観 (3コマ)、キャンパスツアー
- 11月17日 日本語授業参加 (1コマ)、Japanese Popular Culture and Literature (担当: 土屋浩美先生) で授業実践 (報告例1)
- 11月18日 日本語実習参観 (2コマ)、図書館 Special Collection (Oyama Sutematsu, Jean Webster) 見学
- 11月19日 日本文化授業参観 (1コマ)、授業見学 (Gender)、テレビ会議合同授業参観
- 11月20日 日本語実習参観 (2コマ)、日本語授業参加 (1コマ)、公開講演会 (報告例2)、交流パーティー

本報告では、FD 海外研修の観点から、授業実践 (報告例1) ならびに公開講演 (報告例2) に焦点化して、その経緯を報告し、加えて今後の展開に向けての問題点等を記したい。

実践の目的と事前準備

今回の実践の目的は、日本語を解さない、しかし日本文化に強い関心を持つ外国人学生に対して、どのような教材あるいはトピックを選択し、どのようなプレゼンテーションの方法によって伝えることが効果的であるかを試行すること、加えて、そのような実践を通して、日本語を解さない学生たちにとっての日本語学習への動機付けを行うことにあった。授業実践 (報告例1) を行った Japanese Popular Culture and Literature (担当: 土屋浩美先生) のクラスは、クラスレベルとしては上級にあたるが、受講生を日本語学習者に限定していない。よって、受講生の構成は、日本語学習者に加え、日本文化に関心を持つ日本語非学習者である。また、公開講演会 (報告例2) も一般学生の参加が予想されたため、両者とも、英語で授業を行うことを前提とした。

授業実践では村上春樹『ノルウェイの森』の英語版 (*Norwegian Wood*) をテキストとして指定した。翻訳者の Jay Rubin 氏は村上春樹作品の翻訳者ならびに研究者として高名で、信頼感の高いテキストである。土屋浩美先生の全面的なご協力により、授業実践に先立って、当該クラスにおいて英語版テキストの読了を課題とし、さらに村上春樹の文学全般についての事前レクチャーを行っていただいた。よって、授業実践においては、基本情報はすでに共有された段階から話を進めることができた。授業用には handout と PPT を準備した。

公開講演会では、すでに論文として発表済みの「〈暴力〉の表象／〈表象〉の暴力—欲望の再生産とメディア」(竹村和子編『欲望・暴力のレジーム 揺らぐ表象／格闘する理論』作品社、平成20年3月、pp154-168) に基づき、"Representation of Violence/Violence of Representation—Focusing on *She, the Ultimate Weapon* and *Kafka on the Shore*—" のタイトルで行った。handoutは用意せず、PPTのみ用いた。

ともに村上春樹のテキストを選んだのは、英語圏の若い世代において、もっともよく読まれ、また関心が高いからである。加えて、英語版が流布していることもテキストとした理由の一つである。また後者においてサブカルチャーを問題としたのは、米国の日本語学習者にとって、最大の学習動機が日本のサブカルチャーへの親炙にあることを視野にいれ、それらがアカデミックな研究の対象とされる場合に、どのようなアプローチが可能であることを示すことで、趣味のレベルにとどまりがちなサブカルチャーへの興味が、さらに深く学問的に展開可能であることを米国の学生たちに例示するためである。

報告例1: 授業実践

受講生が日本語版を読んでいないことを考慮し、さらに翻訳において生じる問題を指摘することで、日本語表現への興味を喚起することを企図して、日本語版と英語版の比較を中心に授業を構成した。全体の構成は、最初に『ノルウェイの森』についての基本情報を整理したあと①語りの構造 ②英語版・日本語版の比較検討 ③細部分析の事例 の三部構成とした。①③はともに、日本語・英語の別にかかわらず、文学研究の観点から行った。加えて、①の説明では、日本における『ノルウェイの森』研究の一端を紹介することを兼ねた。

資料1. 僕は顔を上げて北海の上空に浮かんだ暗い雲を眺め、自分がこれまでの人生の過程で失ってきた多くのもののことを考えた。失われた時間、死にあるいは去っていった人々、もう戻ることのない思い。

飛行機が完全にストップして、人々がシートベルトを外し、物入れの中からバッグやら上着やらをとりだし始めるまで、僕はずっとあの草原の中にいた。僕は草の匂いをかぎ、肌に風を感じ、鳥の声を聴いた。それは一九六九年の秋で、僕はもうすぐ二十歳になろうとしていた。

I straightened up and looked out of the window at the dark clouds hanging over the North Sea, thinking of all I had lost in the course of my life: times gone forever, friends who had died or disappeared, feeling I would never know again.

The plane reached the gate. People began unfastening their seatbelts and pulling luggage from the overhead lockers, and all the while I was in the meadow. I could smell the grass, feel the wind on my face, hear the cries of the birds. Autumn 1969, and soon I would be 20.

資料2. 僕は緑に電話をかけ、君とどうしても話がしたいんだ。話すことがいっぱいある。話さなくちゃいけないことがいっぱいある。世界中に君以外に求めるものは何もない。君と会って話したい。何もかもを君と二人で最初から始めたい、と言った。

緑は長いあいだ電話の向こうで黙っていた。まるで世界中の細かい雨が世界中の芝生に降っているようなそんな沈黙がつづいた。僕はそのあいだガラス窓にずっと額を押しつけて目を閉じていた。それからやがて緑が口を開いた。「あなた、今どこにいるの?」と彼女は静かな声で言った。

僕は今どこにいるのだ?

僕は受話器を持ったまま顔を上げ、電話ボックスのまわりをぐるりと見まわしてみた。僕は今どこにいるのだ? でもそこがどこなのか僕にはわからなかった。見当もつかなかった。いたいこはどこなんだ? 僕の目にうつるのはいずれこへともなく歩きすぎていく無数の人々の姿だけだった。僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。

I phoned Midori.

“I have to talk to you,” I said. “I have a million things to talk to you about. A million things we have to talk about. All I want in this world is you. I want to see you and talk. I want the two of us to begin everything from the beginning.”

Midori responded with a long, long silence—the silence of all the misty rain in the world falling on all the new-mown lawns of the world. Forehead pressed against the glass, I shut my eyes and waited. At last, Midori’s quiet voice broke the silence. “Where are you now?”

Where was I now?

Gripping the receiver, I raised my head and turned to see what lay beyond the phone box. Where was I now? I had no idea. No idea at all. Where was this place? All that flashed into my eyes were the countless shapes of people walking by to nowhere. Again and again I called out for Midori from the dead center of this place that was no place.

資料1・2のように、日本語版と英語版を対照して示し、とくに作品の冒頭と末尾から、この作品に見られる「語る」行為の動機とその意味を検討した。③についても同様である。②においては、とくに日本語版においてその待遇表現から登場人物の関係性が読みとられることを指摘し、それらが言語構造の違いから、英語版においては消去されざるを得ないこと、それゆえに、とくに語り手のキャラクター把握に、日本語版の読者と英語版の読者との間に差異が生じることを論じた。

資料3。「現代文学を信用しないというわけじゃないよ。ただ俺は時の洗礼を受けてないものを読んで貴重な時間を無駄に費やしたくないんだ。人生は短い」

「永沢さんはどんな作家が好きなんですか？」と僕は訊ねてみた。

“It’s not that I don’t believe in contemporary literature,” he added, “but I don’t want to waste valuable time reading any book that has not had the baptism of time. Life is too short.”

“What kind of authors *do* you like?” I asked, speaking in respectful tones to this man two years my senior.


資料3に如実に見られるように、日本語の「僕」「俺」はいずれも、英語においては「I」としか訳しようがない。しかし、すべての日本語読者が特別の説明なしに理解できるように、日本語表現ではどのような自称を用いるか—「私」「僕」「俺」「自分」「あたし」等—は、その登場人物のキャラクター設定において重要な意味を持っている。すなわち、自称の選択は、性別（あるいはジェンダー）はもちろん、社会階層、年齢、語り手の自己認識までも表象する。村上春樹のテキストを選んだ理由の一つもここにある。周知のように、村上作品の語り手の最大の特色は、年齢に関係なく「僕」を用いる点にあるからである。この点は、日本語未学習者にとって関心をそそるものであったらしく、授業の途中でとった質問では、「どのような自称表現があるのか、すべてあげてほしい」といった要望が寄せられた。また、日本語版に見られる敬称「さん」は、英語版においてはすべて省略されており、加えて日本語版の女性登場人物が使用するいわゆる「女言葉」も、英語版では表現の方法がない。よって、日本語版の待遇表現から見られる社会的な関係性やジェンダー区分等が、英語版では消去されることになる。これらは日本語の特質を示すものであり、受講生たちにとっては興味深い点であったようである。

さらに、この作品では、自称の選択に着目することで、作品分析が大きく展開する。それは、「俺—お前」の選択が、この作品に潜在するホモ・ソーシャルの関係を暴露するからである。ところが、この点については、ヴァッサー大学の学生には理解が困難であった。それは、ジェンダー研究の用語として定着しているホモ・ソーシャルの概念それ自体が彼等には察知しがたいものであったからである。この点は、日本人学生との間の大きな懸隔であった。日本近代文学研究において、ホモ・ソーシャルの概念の導入は非常に有効であり、また日本人学生もすぐにその概念を理解することができる。それはおそらく、日本の家父長制度とこの概念が強く結びついているからだと考えられる。そもそもホモ・ソーシャルの概念は、アメリカ人のジェンダー研究者・イブ・セジウィックによって提出されたものであるが、とくにリベラルな環境にあるヴァッサー大学の学生たちにとっては、実感の薄い概念であったようだ。実践者の側では、アメリカ人研究者によって提出された概念であるから、当然、アメリカ人学生においても容易に受容される概念だと考えていたが、これは誤りであった。研究用語の受容と定着について、あらたな課題とすべきであるとする。

報告例2: 公開講演会

公開講演会においては、先述したように、日本語学習者たちの学習動機の最大のものが日本のサブカルチャーへの関心であることを考え、それを単なる趣味のレベルのとどまらせるのではなく、日本学研究への第一歩となりうることを示し、日本語学習がさらに深化する可能性を提示するため、高橋しんの人気コミック『最終兵器彼女』(2000~2001)と村上春樹『海辺のカフカ』(2002)をとりあげ、日本の現代社会における「暴力」とその消費をめぐる議論を提出した。

Female Gender in Representation



Shojo manga / Seinen manga
 → Difference of Representation

Function and Effect of 'shojo' (girl)
 → Represent her as a Victim

→ Consumption of Female Gender

Phallic Girls (Sento-Bishojo)



少女革命ウテナ
 セーラームーン
 プリキュア
 プリキュア

Narration in Kafka on the Shore

“boku/I”(Kafka) = “A boy called crow”
 (→ + α One more?)

Reality: Two different dimensions of the story
 (I's story/Nakata-san's story)

I's patricide → Entrust on Nakata-san

↓

Indulgence and Discharge

↓

Resurrection

Narration in Kafka on the Shore



村上春樹『海辺のカフカ』新潮社、2002・9

画像を多用した PPT を用意し、さらに英語による解説文を加え、日本語学習者・未学習者にかかわらず理解が可能になるような講演方法を工夫した。本講演の目的は、サブカルチャーに対する批評意識を養うと同時に、それが、日本の現代社会が内包するさまざまな問題を前景化するために有効であることを示すことであった。参加者にはこの意図は十分に伝わり、「サブカルチャーが深い問題をはらんでいることがわかった」等の感想が寄せられた。

今後の課題

二つの実践を通して明らかになったことは、日本語未学習の外国人学生に対して日本文化の授業を行うにあたって、最も重要なことは、題材とテキストの選定である。やはり、英語版があるものを選択するのは必須であろう。また、概念規定や学術用語についても、英語による **handout** を用意し、オリジナルの概念規定に加え、日本文化研究における具体的な適用例等を示すことが必要であると思われる。ヴァッサー大学の学生は高水準の授業を理解することが可能な優秀な学生たちであり、それゆえに授業がスムーズに進んだことは否めない。よって、より平易な授業展開の工夫も今後の課題である。